

『桜の園』に酔いしれる

校長の夏の観賞報告その 3。渋谷の PARCO 劇場 50 周年記念公演として企画された原田 美枝子さん主演『桜の園』の初日に出かけて来ました。

『桜の園』は、19 世紀を代表するロシアの劇作家 A. チェーホフ Антон Павлович Чехов (1864-1904) の最晩年の作品で、正に今、ウクライナ戦争の戦禍に見舞われているドンバス地方を舞台とした物語です。ロマノフ王朝の末期、広大な桜の園を持つ上流階級の地主が、押し寄せる産業革命の波の中で没落して行く人間模様を描いた作品です。



本公演は 3 週間というロングランでありながらも人気が高く、チケット購入が遅かった私の座席は中通路より後方で、ステージから少し離れていることを懸念していました。しかし、いざ開演となる直前に、私の 2 列前にこの作品の演出家であるショーン=ホームズさんがノートとペンを持って着席され、少し興奮を覚えました。今回は、ロシア語版の原作ではなく英語訳本をもとにしたサイモン=ステイーヴンスのテキストを広田 敦朗さんが日本語に訳し、それにアレンジを加えたものと聞いていましたので、どんな演出になるのか楽しみでした。

2 幕 3 時間という長丁場の演目でしたが、キャストの皆さんの台詞も動きもテンポも素晴らしく、随所に客席に呼びかける場面もあり、あっという間に物語に引き込まれてしまいました。また、近代と没落の象徴としての鉄道とセイヨウミザクラ*の白い花枝が使われていました。グローバルな社会という現代、環境変化にいかに対応するか、今の私たちには当てはまる課題を見事に描いた作品・演出でした。

ところで、『桜の園』は、私が学生時代に友人に誘われて入会した市民劇団で観た思い出深い作品の一つです。宇野 重吉さん(劇団民藝)の演出、奈良岡 朋子さんが出演されたと記憶しています。また、2020 年には Bunkamura シアタコクーンで大竹 しのぶさん主演で公演が予定されていましたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症の行動自粛で中止となった作品でもあります。平和と幸福について考える宵となりました。

*その名が示すようにサクランボを収穫する桜。6 月頃開花。学名: *Prunus avium*
参考図書

チェーホフ, 小田島 雄志訳 (1998) 『桜の園 ベスト・オブ・チェーホフ』白水社, 197 頁。